時事新報

外債募集の風說

頃者道路の說に大藏大臣は軍費補充の爲め外債募集に意あり將に其議案を臨時議會に提出せんとすと、此風說の信偽は我輩の保證する所に非らずと雖も東京大坂等の株式市場に於て特に有力なる人々は頻りに外債の利益を主張するとの噂は蓋し事實なるが如し我輩は外債募集說を聞て今更驚く者にあらず亦敢て之れを排斥する者にもあらず事宜に由り或は大に之れを贊助する事もある可けれども我經濟社會の現狀を思ひ又西洋諸國の市場に鑑み今日外債を募集するは策の得たるものにあらずと信ずるなり世には外資輸入を蛇蝎視し外債募集と聞ては事の利害を究めずして唯一筋に反對する者なきに非ざれども我輩は此種の論者を友として共に反對を唱ふる者に非ざるなり

今試に外債論者の趣旨とする所を想像すれば大約左の二項に過ぎざる可し

一、遠征の師ます〳〵其步を進むるに從ひ硬貨の需用はます〳〵多きを加るに方り兌換制度の基礎を破るに非ずんば內地に於て之れを供給するの途なし

二、我國の金融は已に逼迫を告るの今日更に軍費を內地に仰がば不測の恐慌を免る能はざる可し故に低利なる外資を輸入して軍費を供給し以て金融を疏通するは今日の必要なり

以上の二項中前者は財政上より生じたる論旨にして後者は金融上より來りたる意見なり而して一は執政者の腦裏に浮び易く他は投機者流の間に發し易き議論と知る可し凡そ財政上の意見は國家的觀念より發生し金融上の意見は利慾の精神より轉化するの傾きあるに今この兩者が偶然相投じて外債募集論となりたるは頗る不可思議の現象と云ふ可し我輩は此二論旨の當否を究るに先だち假りに外債を以て策の得たる者となしいよ〳〵募集の段となりて之を何地に求むるかを問はゞ必ず先づ金利の最も低き倫敦に於てする事ならん然るに倫敦の市場は果して滿足の結果を吾人に與ふ可きや否や疑なき能はず明治五年我政府が七步利の外債を起すに方り彼れは僅に九十二磅半の拂込を以て之に應じ而も募集費をも徵求したり今日の日本は明治五年の日本にあらず爾來百般の事物都て長足の進步を成し今や泰西諸國と肩を比べて敢て耻ぢざるの地步に立つ者なれども是れは唯我々日本國人と彼國に稀有なる識者の解し得る所にして英國人の多數は我國文明の程度を知らざるのみか中には我國を以て支那の屬國なりと信ずる無識者流さへある其人々より新に國債を募るは頗る難事にして吾々の望む如く低利に甘んずる者は少なかる可し或は我海陸軍連捷の報、夙に英國に傳はりし上は彼國人も昔日の感情を一變して我を敬重すべしとの說もあらんなれども是も容易に信ず可らず俗に云ふ石橋堅固なる英國人民が一二の捷報に接したりとて何ぞ其守る所を更む可きや我兵愈々北京を陷れ名譽ある結局を告るの日に非ずんば到底英國人の感情を一新す可らざるなり斯る事情の下に於て外債を募るも恐らくは四步以上の利息を拂ふて僅に百磅以下の應募者を得るに過ぎざる可しと我輩の敢て想像して憚らざる所のものなり(英國人が額面の拂込に應ぜざるは從來の經驗に徵して明なり)之れに加るに銀に對する金價の騰貴は依然として存在し何人と雖も得て將來を語る者なきの今日金貨國に向て國債を起すは危險の甚しきものと云はざるを得ず恰も投機に類する事なれば苟も他に方便のあらん限りは勉めて之を避くるこそ國家の謀なれ冒險は唯危急存亡に迫りたる時の事なりと知る可し

以上は唯外債募集の必要を假定して其實際に困難あるを陳べたるのみ又顧みて我國の現狀を見るに今日尙ほ未だ其急なきものゝ如し兌換制度を危くするに非ざれば軍費を給するこそ能はずとは論者の主として關心する所なれども目下金銀の準備は次第に減少の勢あるにもせよ尙は七千七百萬圓を存し其內二千二百萬圓の金を時價に換算すれば實に八千六百萬圓の額に上る可し即ち兌換券發行總額の六分三厘に相當するものにして論者が明治二十三年の時に溯りて其割合の四分餘に減却したる事實を追懷したらんには思ひ半に過るこそある可し近時往々準備金の多寡を評する者は歐洲學者の說なりと稱し準備金は發行紙幣の三分一以下に下る可らずと云ふ者あれども我輩未だ斯る學說あるを聞かず(或る學者は銀行の有金如何を論じ其現額預金總額の三分一に下る可らずと主張したるものあり)學說の有無は姑く擱き元來準備の厚薄は國々の狀態に由り自から差異あるのみことにして決して一定の規則を以て論ず可きものにあらず我輩の所見を以てすれば我國に於て兌換券の發行を節するのみと今の如くにして金融社會實際の需要に超るこそなからしめなば八千六百萬の準備は減じて五千萬と爲るも毫も恐るゝに足らず否な尙ほ其以下に下るも兌換の制度に影響するなきを信ずるものなり

外債募集說第二の理由は更に薄弱なるものなり現今經濟社會の感ずる所は金融の必迫にあらずして寧ろ其溢滯に在るが如し戰爭一たび開けて以來諸銀行等は只管警戒を加へて萬一の急に備ふるが故に目下流通紙幣は六月以前に比して却て多きにも拘はらず金融の斯くも圓滑ならざるは日本銀行に於て近來預金の大に增加せりとの噂に徵しても明に見る可し戰爭は國家の大病なり此病にして全治せざる以上は如何に外資を注入すればとて國の衰弱虛脫は得て救ふ可きに非ずつら〳〵我國經濟社會の狀體を觀るに世の實業家と稱する者の中其の大半は通商製造運輸等の業に從事するに非ず假令ひ表面は其業に關係するが如くなるも內實の本職は證券類の賣買取引に奇利を利せんと欲する者に過ぎず近來動もすれば中央銀行に迫りて融通手形の割引を請求し又は其利息の低廉ならんことを懇願するが如き何れも例の實業家に屬する人々にして彼等が外戰以來株券の下落に籠を破られ陰に陽に利息の昇騰せざらんことを謀り今又外債論を主張して私の急場を遁れんとする其心の底こそ窺ひ得られて明白なれ商人の利を重んずるは無理ならぬことにして必ずしも咎む可きに非ざれども之が爲めに國家の長計は誤る可らず今より十餘年前には七步利の公債證書を六十圓に賣買したることもあり今日五步利の整理公債が八十圓內外に下ると覺悟すれば更に何千萬圓の軍事公債を募集するも易々たるのみ故に我輩は徹頭徹尾外債を忌む者に非ざれども先づ之を內に募りて金融の情勢を視察しいよ〳〵硬貨の缺乏を告げて之が爲めにいよ〳〵兌換制度の破れんとする其事實の徵候を確認したる上には更に首を回らして外債の一策に依賴せんことを勸告する者なり

雜報

○敍任辭令

任陸軍監督補　陸軍步兵大尉正七位勳六等　酒井　次郎
任陸軍監督補(以上十月九日)　陸軍步兵中尉正七位　田中　三郎
御用有之秋田縣へ出張ヲ命ス　大藏省主稅官　仁尾　惟茂
新潟區裁判所檢事兼新潟地方裁判所檢事　宮崎多喜衞
補相川區裁判所檢事　大坂地方裁判所檢事　檀崎　芳雄
補新潟地方裁判所檢事兼新潟區裁判所檢事　鰺ケ谷區裁判所檢事　渡邊　玄包
退職ヲ命ス　相川區裁判所檢事　片山　保友
同(以上十月十日)　農商務技師　恒木　樞二十
愛知縣へ出張ヲ命ス　遞信技師　吉井　茂則
大坂電話交換局及宮崎郵便局へ出張ヲ命ス(以上十月十一日)

○疑心暗鬼

天津道臺盛宣懷は頃日何れにか失踪したりとの噂さありしが本月二日の上海メルキユリー新聞は其紙上に左の報道を揭げたり

果して眞ならば極惡なり

本社が天津より受取りたる通信に依れば道臺盛宣懷は頃日同地を逃走して孰れにか蹤跡を晦ましたり日清事件の起りてより日本が常に能く支那海陸軍の運動を偵知し殊に高陞號の牙山に航行するを知り得たるは盛道臺の內通に出でし事は最早疑ふ可からざるものゝ如し隨て道臺の逃走は內外人をして大に安堵の感情を抱かしめたり

右報道の事實は素より信ずべきに非ずと左れど天津道臺盛宣懷と云へば何人も知る李伯爵下の有名なる一人なり清軍海陸に敗北したる結果は大に人心の狼狽を惹起し疑心暗鬼を生じて終には國人互に相疑ひ果ては斯る顯要の人を目するに內通の罪を以てするに至る人心狼狽の狀想見すべし

○李鴻章の出征に就て

李鴻章は續く敗報に坐視するこそ能はず健氣にも親ら三軍を督して出戰すべしと云ひ續いて蘆臺に出たりと云ひ否な蘆臺より山海關に赴くの準備方に整ひたりと云ひ浮說紛々たり今天津より東京の某所に達したる電報に據れば

李鴻章は北京政府に向て出征を奏請したり然れども未だ允許を得ず當地の人心は李の出征を以て日本兵討滅の功を奏すべしと思ひ居れり

とあり蓋し李の爲めに圖るに出征は最も善き策にして萬一日本軍に勝つを得ば昔日の地位を維持するを得べく不幸にして陣亡せば生前の醜を隱し併せて死後の榮を受くるを得べし半殘の老軀を處するの道、出征の外になきを以て李も斷然決心したるならん唯實際の運動はこの報に記する如く未だ爲さゞるものと見ゆ

○英人に對する橫濱商人

英國政府が日本國に對するの厚意は日本人民の深く記憶して忘るゝ能はざる所なり左れども日清事件の當初より今日に至るまで東洋に在留する英人の擧動は日本人の感情を害する者少なからず朝鮮の京城、仁川より北支那日々新聞に通信を送りて日本軍隊の擧動を㮄擊し事實に跡方も無き事を以て日本人を誹ゆるは位地ある英人なりと云ひ英國艦隊に一種の擧動ありたりと云ふ噂さ(非實の如何は暫く云はず)と云ひ東洋諸港殊に橫濱に在る英人の新聞紙は事實を枉げて日本を批難するが如き滿目英人の擧動は無心公平と見る可からざる形跡あるより外人と日々直接の關係ある橫濱の商人中には英人に對して太く不快の感情を抱き其商取引に

就きても同直段なる以
國人に就き直段上の利
取引すべしとの相談
に同意を表して實際に
云ふ英人の擧動は依然
る筆鋒を改めず自國の
政策を執りて日本との
る英人は更に面目を一
ず警告を堅守する事に
日清事件に就ても其結
を惡樣に評して徒らに
如何にも相當の擧動を
日本攻擊に關しては或
を偷んで兼ての非日本
甚しき事例なきに非ず
ざされば斯る少數者の
英國の商品を彼此す
べし

○ジヤツパ…を稱贊す

昨日のジヤツパン
勞力と費用とを惜
確ならんことに注
如き贊辭を與へら
く謝する所なり
平壤の戰に就て時事
ず何となれば時事は
に其戰報を揭ぐると
紙上に此事實を記し
報を他に率先して東
送手段に加ふるに都
る熱心を以てしたる
の特派員をして北征
陷るや否や一人は其
り來り他の二人は戰
旨を以てせり斯て三
し平壤の陷ると同時
出發し途中覺書に記
基て通信を作り之
時事新報は二十七日
の新聞社は十月一日
ものなし時事新報に
新聞社會の驚愕一方
のさへある程の吹
だ斯る詳報に接せず
るも無理ならずと云
新報の信用は立ろに
紙は大概盡らず時事
但し中には之を自
くに冒做したる卑劣
は此度の開戰以來
報告の驚く可き程
報とを區別するに非
好新聞にても檢閲
の紙面に空虛を表
だ曾て一回も紙面
注意の行届きたる

○[illegible]午前一時四十分(青森迄)午後四時四十五分(福嶋迄)午前七時五分(上野迄)[illegible]
○[illegible]午前五時[illegible]午後一時[illegible]
○山陽鐵道發車時刻　神戶發(下リ)午前五時五分(廣島迄)午前七時[illegible]午前九時五十分(岡山迄)午前十一時五十分(廣島迄)[illegible]
○大阪鐵道發車時刻[illegible]